

大統領様

連邦首相様

諸宗教を代表される令名高い方々、

ここ数年間で私たちの世界は大きく変化いたしました。30年前、ユーロミサイルに関する条約が交わされ、冷戦時代の悲しき友であった核戦争の脅威に終止符が打たれました。次期、ベルリンの壁が崩壊しました。グローバル化特有のプロセスにより、民族はさらに交じり、非常に速いコミュニケーションが実現し、大きな市場が生まれました。長年根付いていた覇権(はけん)が姿を消し、新たなグローバルな時代が幕を開けました。しかし、何か足りませんでした。グローバル化された経済という「巨人」の隣に、精神的な統一を図らなくてはなりません。しかし、精神の各世界は、常に心地よかった自らの伝統的な「地平線」に残ってしまいました。新たな出会いや、生活に数々の変化をもたらすグローバル化は、実際精神信仰とっても一種の「探検」であることを頻りに宗教は見逃してしまっただけです。

そして不安が広がってしまいました。巨大でグローバルなスペースや、軋みされる懸念を前に、昔ながらの恐怖だけでなく、新たな恐怖が湧き上がってきます。民族は恐怖感に対する保証を求め、対立を大声で指示するレトリックや血の気の多い政治家の中に安心感を見出します。特定の「敵」に指をさすことは、安心感を与えます。「他者」と歴史がもたらす恐怖に対し、新たな壁を築きます。これが現代社会の矛盾しているところです。一見統一している世界は、同時に分裂しているのです。統合に対する反応としての分裂。

先ほど申し上げたように、営業や経済といった面で統合が進行していく中、現代社会には精神の統一が欠けてしまったのです。しかし精神の統一とは、「基準への適合」や「均一性」を意味しているわけではありません。異なるながらも友好関係を築けるような偉大で奥深い精神の対話、諸宗教の対話を意味しています。このような対話は、日常生活の中で、地元社会でそして世界レベルで行うことです。

このようにして経済の唯物的な概念をもとに、魂に欠けるグローバル化が進んでしまいました。このような枠の中で教皇ヨハネ・パウロ2世が共に祈るために世界の諸宗教をアッシジに招いた1986年より、私たち聖エジディオ共同体は、諸宗教間の対話を継続してい課なくてはならないという責務を感じました。力にそなわなかったが、対話が伴う関係を失わないように執念をもって行ってきました。毎年多くの参加者と共にこの道をたどってきました。中には偉大な精神を持つカルロ・マルティーニ枢機卿、ラビのシラート、山田座主、パウマン教授、ガッサン・トゥエニなどがいました。またこの場で再開を期待する親友たちで4年前、平和運動中シリアで謝罪されたアレppoの司教達、マール・グレゴリオス・イブラヒムやポール・ヤツィギ等もこの道を歩んできました。

精神の流れは歴史を変えます。しかし、分かり切っていることにもかかわらず、忘れられがちな現象です。一つ例を申し上げます。それは500年前のプロテスタントの宗教改革です。聖書から、聖書への異なるアプローチから世界は変わりました。そして今日、ここドイツの地で、意識を動かし、「敵」自身にも自らの改革を強いた精神的イベントにオマージュをささげに来ました。ドイツの地で生まれた精神の歴史の一コマは、その後ヨーロッパレベルの、そして世界レベルのイベントになりました。

しかし、グローバル化をいった限りの巨人は魂を必要としています。友好関係を祈りの中で展開される精神同士の対話の中で魂が育ちます。異なる伝統を持つ宗教にとって、祈りを通した神との対話、聖なる書物との対話、宗

教家との対話などと、対話は基本的な構造体になります。宗教は、息づく生体であり、男性や女性の憧れを集めるのです。宗教は、イデオロギーではなく、地に根付き、人々の悲しみ、喜びや汗のそばに存在し、彼らの呼吸一つ一つを包み込むような共同体なのです。私は、悲しみの場所や難民の恐ろしい旅での悲嘆こくれる人々の祈りを見て来ました。

各制度で見受けられる縦型のプロセスではなく、宗教は地元社会や人間、住宅と常に関係を持ちます。その関係は、シナゴーク、教会、モスク、寺院やその他の聖なる場所を通して展開されます。だからこそ、特定の民族を侮辱する場合、女性に暴行を加え、聖なる場所を破壊するのです。

何百万人もの人々の距離が縮まり、共存していますが、実際に出会うことなく、他人として暮らしています。毎日人々を対話し、入輪の道を切り開いていかなくてはなりません。互いに助け合い、異なる者たちが共存できるのです。ここでこのテーマについて話すことはできませんが、貧困を共に戦うのも平和の道の一つです。ここではやはりアフリカを思い出し、ニジェールの大統領にご挨拶を申し上げます。人口にだけでなく人類の未来の一部であるアフリカからの名高い代表者を常に求めて来ました。発展に於いて、アフリカ諸国との協力は非常に重要です。世界の北部からは正義を求めると同時にアフリカ諸国の政權を握っている者たちも正義を施さなくてはなりません。宗教は、人類の運命に対しより広範囲な視座を持っているだけでなく、他者を、多くの貧しい人々を隅に置いて、一部のみに保証できる将来はないと思わせてくれます。

憎しみをあおる者たちは、いかに宗教が役に立つか理解したのです。敵とテロリズムの文化を養うために宗教を利用してきました。宗教は、暴力の火を消す水にもなれば、さらに火を増すガソリンにもなりうるのです。テロリズムのイデオロギーは、暴力的な人々の手に掛ければ恐ろしいツールになり、大きな損害を伴いますが、決して勝つことはありません。だからこそ、人々に光をもたらす諸宗教代表者の役目が決定的になります。アル・ハザールのイマーム、アル・タイプは、イスラムを名乗るテロリズムの場合、イスラムの名を口に出す権利を持たない者たちによってイスラムは人質になっている、と断定しました。

暴力や戦争は決して聖なるものでないと宗教は教えてくれます。平和のみが聖なるものです。平和を築くには、毎日道を手作業で切り開き、ポロポロになった人間という生地を丁寧につなぎ合わせ、協力を展開しなくてはなりません。信仰にインスピレーションを得る男女は、世界の奥地でそれを行う辛抱鎧を持っています。しかし、過去の枠から一歩外に出なくてはなりません。諸宗教の伝統に秘められている希望という宝は、毎日の生活で隠されているはいけません。一人ひとりの信仰者が、平和のオペレーターになることができます。現代社会が最も必要としている新たな勇気を見つけなくてはなりません。インド大陸のイスラムの偉大な詩人、ムハマッド・イクバルは、「成長するのを恐れるな。試してみろ！神の人間！天国は狭いところではない！」と書きました。世界には、平和を築く場所が狭いわけではなく、より勇気を必要とします！だからこそ私たちは今ここにいます。